

校長通信

東京都立戸山高等学校

校長 布施 洋一

着任のご挨拶

4月1日付で130年の歴史と伝統のある戸山高校の校長に着任した布施洋一と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

7日（金）には入学式が行われ、玄関前の満開の桜に迎えられた363名の新入生が、これから始まる高校生活への期待に胸を膨らませて、戸山生としての第一歩を踏み出しました。新入生の皆さんには、学習を学校生活の中心に据えるとともに、部活動や学校行事にも本気で取り組んで、高校生活での夢や目標、また卒業後の夢や目標を、自らの力で現実のものにしてほしいと願っています。

入学式の前日の6日（木）には、平成29年度の始業式が行われましたが、そこで私は在校生の皆さんに、「本気」という詩の一部を紹介しました。作者は後藤静香（せいこう）で、大正から昭和にかけて活躍した社会運動家であり、教育者でもあった人です。私が在校生に紹介したのは詩の冒頭の以下の部分です。

本気であれば 大抵のことができる

本気であれば 何でも面白い

本気でしていると 誰かが助けてくれる。

どんなことでも本気ですするということは、ある種の苦しさを伴います。中途半端なところで妥協せず、とことん目標を追求していけば、必ず壁にぶつかります。その壁を乗り越えようとしても簡単には乗り越えられない。それがその人の限界状態というわけです。私も今まで何度も壁にぶつかり、その都度自分の限界を思い知らされてきました。

しかし、人間にとって自分の限界を知るということは大変重要なことだと思います。なぜなら、そこから新たな可能性が開けてくるからです。「本気」という詩は、そのことを言っているのだと思います。

この詩は、万策尽きた限界状態まで本気でやりきれば、本当に何でも面白くなるし、必ず誰かが救いの手を差し伸べてくれると言っています。そうすることで、今までできないと思っていたことができるようになる。それは、その人が人間的にも一歩成長した、大きくなったということです。だから、本気であれば大抵のことができるわけです。後藤静香は出版社を立ち上げたものの資金繰りがつかずに倒産の憂き目を見るなど、大変苦労した人なので、これは彼の実感から出た言葉だったのだと思います。

生徒の皆さんは、様々な夢や希望を持って、戸山高校に入学してきたと思います。戸山高校は、都立高校の中でもあらゆる意味で恵まれた学校です。これだけの恵まれた環境に身を置いているのですから、それを最大限に生かさない手はありません。もし壁のあまりの高さに恐れをなして、本気で取り組みもせず、引き返してしまうようなことがあったら、それはあまりにも勿体ないと言わなければなりません。

私は生徒の皆さんに、あらゆることに本気で取り組んでほしいと思っています。それは言葉を変えて言えば、「挑戦」と言ってもいいかもしれません。どんなに苦しくても挑戦し続けていれば、やがて壁にぶつかって限界状態になりますが、そこまで行けば何でも面白くなるし、誰かが必ず助けてくれます。そしてその先には、今まで手の届かなかった新たな世界が必ず広がっているはずです。